

# 『大乘無生方便門』の禪定論

中 島 志 郎

- 1 『大乘無生方便門』「総彰仏体」の基本思想
- 2 『大乘起信論』の影響
- 3 天台『小止観』対境止観との対比
- 4 五処解脱、一切処解脱
- 5 『大乘無生方便門』という名称
- 6 結論

## 1 『大乘無生方便門』「総彰仏体」の基本思想

初期禅宗いわゆる北宗の代表的文献『大乘無生方便門』には、現在六種に分類される異本が知られる。<sup>(1)</sup>

禅宗の成立過程を考える上で、『大乘無生方便門』の重要性は多言を要しないが、長い禅宗史の上では圭峰宗密（780-841）の『円覚経大疏鈔』（三之下）にまとまった論評が見られるが、以後、北宗文献たる同書は禅宗の傍系として等閑視されてきた。その重要性が認識されるには近代を待たねばならなかったが、近年の北宗文献の研究はめざましい展開を見せる。『大乘無生方便門』（以下『無生方便門』）も宇井伯寿、鈴木大拙、伊吹敦、河合泰弘、韓伝強等諸氏の研究成果が生まれ、その変遷過程と諸本の系統も解明されつつある。<sup>(2)</sup>

本稿は、現在確認されている六種の「五方便系文献」（韓 [2018]）のうち、もともと古形を留めると見なされる S2053 系（いわゆる第一類型に分類される）『無生方便門』の五門体系のうち、第一総彰仏体の本文を中心に、特に禪定思想と目される部分に注目して、その思想的特徴を考える。いわゆる、次世代の荷沢神会（684-758）に始まる北宗批判の、頓漸修証の修道をめぐる諍論の妥当性

2 『禪學研究』第99號, 2021年3月

を判断する上で、北宗の禪定思想の解明はまず確定しなければならない前提的問題である。

いま『無生方便門』の古形を検討することで、初期禪宗の特に北宗禪定論の解明に手掛かりを得たい。

『無生方便門』の基本原理解(※『無生方便門』本文は韓伝強(韓 [2018])に依った。)

汝等懺悔竟、三業清浄、如浄瑠璃、内外明徹、堪受淨戒。菩薩戒是持心戒、以仏性を戒性。心警起即違仏性、是破菩薩戒。護持心不起即順仏性、是持菩薩戒。

(韓 [2018] p114)

冒頭部の菩薩戒授戒儀とされる一段で、仏性を戒性とするのは『梵網経』菩薩戒(仏性戒体)を前提とするからであるが、この受戒によって仏性が戒性を担保する。持心戒である菩薩戒は、仏性(戒性)と心作用が菩薩戒持戒に関わる、つまり心警起、心不起がそのまま仏性の違順と一体的関連を持つ。三学一等、定慧一等といった、文字通り戒定慧三学の一体的理解は、道信以来の成立期禪宗にとって原理的な意味をもつと考えられるのだが、菩薩戒をめぐる論点は、本稿の当面の課題ではない。本文続き、

虚空無一物、清浄無有相。常令不間断、從此永離障。眼根清浄、眼根離障、耳根清浄、耳根離障。如是乃至六根清浄、六根離障。一切無礙是即解脱。不見六根相、清浄無有相。常不間断、即是仏。(同上 p115)

「虚空無一物、清浄無有相」から離障が導かれるのだが、その離障とは眼、耳等六根の清浄であり、六根清浄とは六根の離障である。かくして清浄無有相の一切無礙が解脱である。六根の相を見ず、清浄に相無し、これが仏である。

「六根清浄」以下一連の教説は「清浄無有相。常不間断、即是仏」まで『無生方便門』の核心課題である解脱へ向けての基本的な論理が一挙に提示される。ただ次に、

是没是真如? 心不起、心真如。色不起、色真如。心真如故心解脱、色真如

故、色解脱。心色俱離、即無一物、是大菩提樹。 (同上 p116)

冒頭の「心不起即順仏性、是持菩薩戒」という「心不起」に対し、「六根清浄、六根離障」に対応する「色不起」がいわれ、心、色から心色俱離に至る「心色関係」が、以下の基本構図となる。

心色関係は『起信論』の基本構図でもあるが(後述)、心色関係を始めとする二項関係を基本に論理を構築するのは『無生方便門』の特徴と云える。

それは覚の三義のように最終的な二項の統合に至る論理構成だが、二項図式冒頭の授戒儀に、心警起と心不起を破菩薩戒と持菩薩戒と定礎して以来、体用関係他の対抗関係を表す『無生方便門』の基本論理である。

二項の基本構図とは、<sup>(3)</sup>

順仏性(心不起) 離念、無隔障、体、法界一相、真空、六根不動、根本智、無分別智、浄法界、仏界

違仏性(心警起) 念起、隔障、用、十八界(見聞覚知)、妙有、六根動、後得智、分別智、染法界、衆生界

この上下段二項図式は体用関係自身も含む、相即、展摂といった不可分の二項対応の図式である。『無生方便門』に頻出する同義語の枚挙として、二項に分類できるのだが、これは『無生方便門』第一総彰仏体に限らず、五方便系諸本全体で維持されている思考の基本構図といえる。<sup>(4)</sup>

結局は離念之体(真如・仏性・戒性)を根本の原理として、体用関係を典型とする二項の展摂関係に帰着する。

心色は内外、能知所知関係と理解できるが、『起信論』の基本構図でもある(後述)が、『無生方便門』は単に心色にとどまらず同時に、覚の三義(覚有三种)、自覚(離心)覚他(離色)覚満(心色俱離)が含意されており、覚に一体収斂する三である(三一の論理は『五方便北宗之一』第五自然無礙解脱門(韓[2018] p198)をはじめ随処に見られる<sup>(5)</sup>)。その覚の定義が、第一総彰仏体の根本原理となる。即ち、

仏是西国梵語、此地往翻名為覺。「所言覺義者、為心体離念。離念相者、等

虚空界、无所不遍。法界一相、即是如来平等法身。於此法身、説名本覺。」「覺心初起、心无初相、遠離微細念、了見心性、性常住、名究竟覺。」(同上 p116) 仏とは覺と名づくに続く「所言覺義者以下、説名本覺。」「覺心初起、…名究竟覺」は、『起信論』の対応箇所で、

所言覺義者、謂心体離念。離念相者、等虚空界、無所不遍。法界一相、即是如来平等法身。依此法身、説名本覺。 大竹 [2018] p111-2

「覺義とは心体離念。離念相は虚空界に等しく、無所不遍」云々以下の「法界一相、平等法身、法身によって説いて本覺と名づく」まで『起信論』の阿梨耶識の二種義(覺、不覺)のうち、覺、本覺の基本定義であり、『無生方便門』の基本原理解にそのまま重なる。

続く「覺心初起、…名究竟覺」は『起信論』心生滅門の阿梨耶識の定義(竹 p65 真妄和合)に続く一段に相当する。究竟覺に至る四段階、凡夫、二乗、法身菩薩、究竟覺の最期、「如菩薩地尽方便満足、一念相應」に続く語に該当するが文言は相違がある。<sup>(6)</sup>即ち、

『起信論』「得見心性、心即常住、名究竟覺」は、『無生方便門』には「了見心性、性常住、名究竟覺」としている。

『起信論』「心即常住、名究竟覺」に対し、『無生方便』「性常住」(『北宗』三之一も同じ。『起信論』も直前に得見心性という。)は、心体離念、離念之体(等の同義語)を根本の原理と理解するのであり(『無生方便』別本第五「覺性是淨心之体」(韓 [2018] p201)という用例も見える)、後段の展開を考えると得見心性。心即常住名究竟覺。より『無生方便』の性常住が論理的には「心性」を根拠にした改変といえるだろう。『無生方便門』冒頭、仏性即戒性や、心色俱離、覺性円満(韓 [2018] p116)の用例など、心より「性(戒性、覺性)」としての論理展開が際立つからである。<sup>(7)</sup>続いて、

問、是沒是法界。(答)意知是法界、是十八界。眼見意知念起、多想生、隔障不通。是染法界、是衆生界。 (同上 p117)

法界とは何かと問い、染法界(衆生界)と淨法界(仏界)が提示される。

法界一相於十八界中有二、一染一淨、先染後淨。(同上 p117)

といい、ここに些か唐突に十八界が登場する。法界（一相）とは十八界に他ならないと定礎され、眼が色を見るに意が作用すれば念が起ち、障が生まれる、これが染法界の十八界である。<sup>(8)</sup>

六根（十八界）が染淨に分かたれるのであり、「六根清淨、六根離障」の当所を指すのが淨法界である。

是没是淨法界？ 眼見意知離念、即無隔障、是淨法界、是仏界。是没是仏界。法界一相、意知処是法界。眼見色、耳聞声、…意通知上五種法、若心起同縁、即是染法界、是衆生界。若不起心同縁、即是淨法界、是仏界。(同上 p117)

淨法界とは何か、眼（が色を）見て意が知るも離念（不作意識）ならば隔障が無い、「眼見意知念起」の意知（意通知上五種法・意識作用）に対して「眼見意知離念」、即ち意識不分別であること、「心起同縁」に対して「不起心同縁」であること、これが六根清淨、六根離障の淨法界、仏界である。

この染淨関係こそ冒頭の一段で、仏性違順、菩薩戒の破戒、持戒を「心瞥起、心不起」の対比としたのを承けて念起と離念（の染淨関係）に配した『大乘無生方便門』の基本構図である。

法界一相は十八界に展開するが、法界一相と十八界の関係は語彙は異なるが基本構図として体用関係とも定慧、展摂、舒卷関係とも理解されている<sup>(9)</sup>（後述）。法界一相を体、十八界を用として、十八界を構成する五根に対する意根の作用を「念起と離念」とに分ち、そのまま念起は染法界、離念は淨法界の二法界に分かたれる<sup>(10)</sup>。

第一総彰仏体の続き、『無生方便門』第四明諸法正性に、

達摩和上解云、心不起是離自性、識不起是離欲際、心識俱不起、是諸法正性。如水大流盡、波浪即不起。如是意識滅、種種識不生。(韓 [2018] p138)

心識俱不起とは、意識滅であるというが、それが識不生だとは、どういうことか。

『通一切經要義集』第一では「眼見色、意同知、染法界。心不起、不同知、淨

法界。悉攝一切色塵、是名惣持度門、是名自在。余准上。韓 [2018] p145  
『五方便之諸經要抄』末部に「所以言大空者、五根与塵合時、意識不以五識同緣、  
五識無分別、則是空。空則是智、智則是成所作智。智中含惠、故名大惠。…塵  
不見根、根離染、則是大惠。…。(韓 [2018] p223)

等々、根塵識の關係が反復して繰り返され、その論理には共通性がある。

『摩訶止観』第一大意では陰入界の分析は簡略に、因縁和合生眼識、眼識因縁生意識 (T46,16a) と分析するにとどまるが、いったい心意意識の何が問題なのか。

## 2 『大乘起信論』の影響

『起信論』の心、意、意識の定義を整理しておく、と、『起信論』に云う、  
復次生滅因縁者、所謂衆生依心、意意識転故。此義云何。以依阿梨耶識説、  
有無明。不覺而起、能見能現、能取境界、起念相続、故説為意。此意復有五種  
名。(大竹 [2018] p139-140)

『起信論』にいう、生滅因縁とは衆生は心によって意と意識を転ずるのであり、  
不覺の故に能見能現して境界を取って念を起し相続する、それが「意」である。

その意には五種の名(業識、転識、現識、智識、相続識)があり、五種の作用がある。その第三が現識である。

三者名為現識。所謂能現一切境界。猶如明鏡現於色像。現識亦爾。隨其五塵  
對至即現無有前後。以一切時任運而起常在前故。(T32,577b、大竹 [2018]  
p141)

この意の五識は結局、心動動心の無明不覺の作用であるが、第三現識は五根  
に対する五境(色声香味触)つまり一切境界を心に現出させる作用である(能  
現一切境界)。

『無生方便門』に眼見色意知念起という、この意には能現一切境界の能作用  
はないが、『方便門』の意は第三現識の位置に相当する。

ただ『起信論』の五種の意の第五相続識は、また別の能力を持つ。

五者名為相續識。以念相應不斷故。住持過去無量世等善惡之業令不失故。  
(T32,577b)

第五相統識は、次ぎの意識の定義に連なっていて『起信論』は意に続けて意識について、

復次言意識者、即此相統識、依諸凡夫取著転深、計我我所。種種妄執、隨事攀縁、分別六塵。名為意識。亦名分離識。又復説名分別事識。(T32,0577b、大竹 [2018] p148)

という。次の意識は、上の意の五識の相統識に重なるのであり、六識総じて意識ともいうが、凡夫は種々に妄執して対象にとらわれ六塵を分別し、さらに執着する、それが意識と呼ばれ、分離識、分別事識ともいう。

五処解脱でいえば、五根五境五識と意識の関係では、特に意根の働き（念起）は、「眼見色意識同縁知、眼等五根依塵、五処期染」と意識と五根が同起して染法界にもなり、不起（離念中眼見色不分別）の浄法界との分岐点となった。この念起、念不起（離念）が意識と五根の場（五処）の染浄を分かつと考えられる。ただ『起信論』にあっても心と意、意識、特に意（第五相統識）と意識（此相統識）の区別はやや曖昧さが残ると指摘される（竹村（2017）p112）が、『無生方便門』でも意と意識の用法にもそれは窺える。

『起信論』の意識の定義は斯様であり意識は六塵を分別することで、分離識とも、分別事識とも呼ばれる。

まさに『大乘無生方便門』染法界である。染浄二法界の分立も、この意と意識を離れ（離念）、起こさず（念不起）、動ぜざる（不動）ことが浄法界、仏界である。

このように『起信論』の影響は決定的だが、しかし、『起信論』の論理から云えば、五種の意（相統識）末尾、次の意識の直前で心を中心に、

是故三界虚偽、唯心所作。離心則無六塵界。(T32,577b) とか、

是故一切法。如鏡中像無体可得。唯心虚妄。以心生則種種法生。心滅則種種法滅故 (T32,577b、大竹 [2018] pp143-147)

と『起信論』は唯心に徹した認識を見せるのであり、六塵即、色声香味触（五塵）と法（意識）も心を離れては<sup>(11)</sup>ない。

先の「意識」についても六塵分別する相統識（分離識、分別事識）であり、五意説、六種染心など心と意識の分類はあるが、六根六境、十八界の和合が染浄の分岐点となることは『起信論』の主題とはならない。『起信論』の四種方便（方便有四種）も十八界に展開するわけではない。（そもそも相統識は定義上、染心である）

『大乘無生方便門』の染浄法界に帰ると、『起信論』にいう、「三界虚偽、唯心所作、離心則無六塵界」とか「顕示從生滅門即入真如門。所謂推求五陰色之與心。六塵境界畢竟無念」（T32,579c、大竹 [2018] p222）という立場からは法界一相、十八界を浄法界（染法界）として展開する『無生方便門』の論理は生滅に関心を置く『起信論』には還元できない。つまり六根六境を観察する止観は生まれない。

『無生方便門』において念起や意識は分別である故、染法界に他ならないことは論理的に『起信論』相統識と同様だが、見聞覚知、六根六境和合に対する意と意識において染浄を分かち、心不起、不分別こそ浄法界、仏界であると特徴づけるのが『無生方便門』である。

次ぎに見るように『無生方便門』の五処、一切処は意と意識を包摂するのが心処というほどの理解（後述）であろうが、染法界と浄法界、衆生界と仏界の定義につながる重要な一節である。即ち、

法界一相於十八界中有二、一染一浄、先染後浄、眼見色、意識同縁知、眼等五根依塵、五処起染、即一切処染。（韓 [2018] p117）

問、是沒是浄法界。浄法界者、於離念中眼見色不分別、即於眼処得解脱。余四亦同。五処解脱、即一切処解脱。一切処解脱即一切処浄、即是浄法界、是仏界。（韓 [2018] p117）

と、染浄を分かち解脱を明かす一段だが（後述）、謂わんとするところ心不起とは五根（見聞覚知）に対する意識不分別と理解するべきなのであるが、さ

らに別本だが、六『五方便之諸經要抄』では、

所以言大空者五根与塵合時、意識不以五識同緣、五識無分別則是空。

(韓 [2018] p223)

と、根塵識の関係にあつて五根五識と意識の関係を論理的に整理しており、明快な理解と云える。このように心、意、意識三者の区別、意と意識の別は『無生方便門』の重要な論点であるのだが、『起信論』同様にやや厳密さを欠く表現も残る。

しかし、なぜ万法唯心ではなく法界十八界が浄法界、解脱の当処なのか。法界一相を十八界に展開し、六根六境、見聞覚知の当所に染浄法界を見る、その論理の源流は、どこに見いだせるか。

### 3 天台『小止観』対境止観との対比

確かに『無生方便門』の第一総彰仏体は宗密の指摘を待つまでもなく『起信論』の論理に依つて構築されている。しかし第一総彰仏体の基本原理は全てが『起信論』に解消できるものではない。『起信論』の仏即覚義や法界一相といった基本原理に対して、『起信論』の四種方便は、十八界に展開するわけではない。『無生方便門』の禪定思想の核心ともいえる念不起の十八界（浄法界・仏界）が主題となることもない。『無生方便門』の特徴的論理といえる法界一相と法界十八界の展撰、体用（離念之体と見聞覚知是用）の関係という基本構図が『起信論』に解消できないとすれば、なぜ法界一相（離言之体）は十八界（五処解脱、一切処解脱）に開かれたのか？

そこで陰入界十八界の分析という点で想起されるのが天台智顛『天台小止観』（以下『小止観』）歴縁対境止観である。智顛『小止観』第六正修行に詳説されるところ、止観を修するに、一坐中止観と二歴縁対境止観の二種がある。止観による対治を明かして、

行者、若能如是、於端身正坐之中、善用此五番、修止観意、取捨不失其宜、当知、是人善修仏法。能善修故、必於一生、不空過也。

(T46, 467c、大野 [2004] p148)

と先に坐中修止觀の機能を示して善修を勧めて結ぶが、次の、

第二明歷緣對境止觀でも一切処一切行を依とした止觀双運の実践で不可得空、一切空寂の觀取を目的とする。<sup>(12)</sup>

若於一切時中、恒修定慧方便、当知是人、必能通達一切仏法…此十二事中、修止觀、故名爲歷緣對境修止觀。 (T46,467c、大野 [2004] p149)

として歷緣對境止觀（歷緣修止觀と對境修止觀）が明かされる。

二、歷緣對境止觀とは、

復次第二 明歷緣對境修止觀者、端身常坐、乃爲入道之勝要、而有累之身、必涉事緣。若隨緣對境、而不修習止觀、是則修心有間絕、結業觸處而起、豈得疾與仏法相應。 (T46,467c、大野 [2004] p149)

第二は縁に歴り境に対して止觀を修することを明かす。端身常坐は、入道の最勝の方法だが、かならず具体的な事象にかかわることになる。もしそのような縁に従い境に対して、止觀を修習しなれば、是れ則ち修心に間絶あり、煩惱が生起することにもなり、どうして仏法と相應することなど望み得るだろう。

この第二に云う「歷縁」とは六種縁（行住坐臥、作作、言語）の六威儀について日常起居動作において止觀を行ずるのであり、対して對境止觀（六根門中修止觀）とは、六根（眼耳鼻舌身意）に対する六境を併せ觀察し、六根の々に空寂、不可得を看取する止觀修道の對治法である。

云何名歷縁修止觀。所言縁者、謂六種縁。…所言境者、謂六塵境、一眼對色、二耳對声、三鼻對香、四舌對味、五身對触、六意對法。

(T46,467c、大野 [2004] p149 p235 参照)

「眼見色」を例に取ると 眼見色を止觀で對治するとは、止については、

次云何名眼見色時修止、隨見色時、即知如水中月、無有定実、若見順情之色、不起貪愛。若見違情之色、不起悲惱、若見非違非順之色、不起無明、及諸乱想。是名修止。 (T46,468c、大野 [2004] p153 参照)

眼が色を見るとき止を修するとは、ものを見ても水中の月の如く、定実有る

のではなく、もし意に適っても貪愛を起こさず、意に沿わなくても悲悩を起こさない、もしそれ以外のものに接しても無明、諸乱想を起こさない。これが修止である。

続けて観については、

云何名眼見色時修観。応作是念、隨有所見、即無見相。所以者何、於彼根塵、空明之中、各各無見、亦無分別、和合因縁、出生眼識。眼識因縁、即生意識、意識生時、即能分別、種種諸色。

因此則有、一切善惡等法、即当反観、念色之心、不見相貌。当知、見者及一切法、畢竟空寂、是名修観。(T46,468c、大野 [2004] p153 参照)

眼が色を見るとき観を修するとは。見るといっても、見る相は存在しない。なぜなら、根も塵も、空明の中も、各各見無く、分別もなく、因縁が和合して、眼識を出生じ、眼識の因縁は意識を生む、意識が生じる時、種種諸色を分別する、一切善惡等法は逆に、念色の心は、相貌を見ず。まさに見るものも一切法も、畢竟空寂である、これを修観という。

この対境止観は六根六境にわたって、「一切法皆不可得。則妄念心息（不起）是名修止」「一切法畢竟空寂、是名修観」（T46,467c-469a）

という、徹底した空観の了解を目指す止観俱行として遂行される。<sup>(13)</sup>

先に見た通り眼見色時にあって、不起貪愛、不起悲悩、不起無明、及諸乱想という修止（T46,468c、大野 [2004] p153 参照）は、『無生方便門』に照らして云えば、「心不起」の故に意識は不分別であるという、染法界に対する浄法界の光景であるといえよう。

また「当知見者及一切法、畢竟空寂」という修観は、眼見色時にあって、無見相、無見、無分別であり、まさに「和合因縁、出生眼識、眼識因縁、即生意識、意識生時、即能分別」（前掲同書 9）と意識の分別を捉え、その心を観察してみると相貌は見えない。これが一切法畢竟空寂という観察であるが、『無生方便門』が眼等六根（五根）に対して、意識の分別作用（心起）こそが無明、

乱想、一切煩惱の因となり、離念之体、心不起、念不起として解き明かす浄法界の根塵関係は、「不起無明及諸乱想、是名修止」であり、また『無生方便門』の説く「法界一相」も無相なのであることから、一切法、畢竟空寂の修観の到達点は一切処解脱と別所のものではない。離念之体を十八界に展開するところに浄法界は顕現するのであり、対境止観の到達点を『無生方便門』は解脱と呼ぶのである。

智顛の対境止観は『無生方便門』法界十八界に摂取されて、十八界の染浄のうち浄法界、仏界に展開された。ただ『無生方便門』の主たる関心は、六根六塵の分析よりも、止観の到達点といえる念不起の浄法界、仏界の真如仏性、心不起の根本智の提示と開発にある。

その浄法界、仏界の根本智が十二処十八界の一々に実現されるのが五処解脱、一切処解脱と称される。

発展というのは、天台止観では、一切処、一切行を対境として、「煩惱対治」の「止観修行」という修道方法（解脱ではない）としての性格が厳密に規定されている（必於一生、不空過也（大野 [2004] p148） 自覚の下に構築された天台止観があくまで止観による六根対治に終止するに、『無生方便門』の所説は、心不起、六根不動が解脱であるといい、止観による対治を法界十八界に於ける五処解脱、一切処解脱に新たに発展させている（後述）。

その根拠が『無生方便門』自ら定礎した「仏即覺義」に始まる法界一相、離念之体たる真如本覺、覺性の本来成仏の原理なのである。

#### 4 五処解脱、一切処解脱

『起信論』の「仏即覺義」や「本覺」「離念之体」等々を成仏の根拠にして、法界一相と十八界を展撰（体用）等の関係で理解した『大乘無生方便門』は十八界を染浄の二に分けた。先に見た

法界一相 於十八界中有二、一染一浄。先染後浄。眼見色、意識同縁知、眼等五根依塵、五処起染。（即）一切処染、即是染法界、是衆生界。

(韓 [2018] p117)

法界一相を展開した十八界には染浄の二法界あり、先染後浄、眼見色に意識が働けば(意識同縁知)、眼等五根は塵によって五処起染、一切処染となる、それが染法界、衆生界である。

五根が塵に染まれば染法界であるに対し、一方の浄法界とは、続く一段、対して第一総彰仏体の続き、

問、是沒是浄法界。浄法界者、於離念中、眼見色不分別、即於眼処得解脫。余四亦同。五処解脫、即一切処解脫、一切処解脫、即一切処浄、即是浄法界、是仏界。(同上 p117)

浄法界とは、特に離念中であって、眼見色(根識塵)に意根が不分別であること、それが眼処に解脫を得るということ。心・意・意識と十八界の関係をめぐって解脫を解き明かす根本的な構図の提起であり、そのまま浄法界、仏界の定義となっている。その解脫を五処解脫、一切処解脫と呼ぶが、浄法界、仏界に他ならない。すでに、真如とは何かと問い、

心不起心真如、色不起色真如。心真如故心解脫、色真如故色解脫。

(同上 p116)

心色俱離、即無一物、是大菩提樹、という心色関係にあつて、色真如のゆえに色解脫が明言されていたが、五処といい一切処というも十八界の当所に解脫を了解するのである。<sup>(14)</sup>この是浄法界、是仏界に続けて、

離念相者、等虚空界、無所不遍、属自、法界一相、属他。

(同上 p116-7、p165)

この覚三義もすでに自覚、覚他、覚満を説明して、離心自覚不縁五根、離色覚他、不縁五塵、心色俱離覚性円満、即是如来平等発心。

(同上 p116)

と説示されたところであり、類似の表現で、『通一切経要義集』に、離念相者、等虚空界、無所不遍。已上為覚義。法界一相、已上為覚他。即是如来平等法身。是名覚満、依此法身、説名本覚、名三覚。(韓 [2018] p143) という表現もあり、

属自は自覚、属他は他覚の意味である。

この自覚、覚他、覚満は覚の三義として覚満に統合される三一相即の構図と云え、属自、属他は心色関係にも対応させて理解され、心、色、心色両俱という関係でもあるが、いづれも浄法界の内実として提示されている。

染（染法界）とは意識が縁に同じて知り、五識が起つが、浄（浄法界）は離念中に五根不分別の故に眼見色（眼処）等の五処に解脱を得る（五処解脱）、それは十八界の各処に展開すれば一切処浄、一切処解脱である。

法界一相と法界十八界は展撰の関係だが、染法界に対し浄法界では六根の作用（眼見色等）はあっても、意識は作用しない、その「不分別」が浄法界の根拠である。

『無生方便門』の五処解脱、一切処解脱の基本構図がここに得られたといえよう。

それは『無生方便門』を一貫する心体離念から展開する浄法界の論理と云え、諸本の各所にさまざまな語彙で表現される。<sup>(15)</sup>

かくして法界一相は開けば、十八界（根塵識）の作用の当所（一切処）に解脱を実現するという禪定思想は、上来考えたように天台『小止観』『歴縁対境止観』にいう「対境止観」を想起せざるを得ない。

ただ決定的相違は『小止観』の止観行が「修道」であるに対し、『無生方便門』の六境（六根六識）不可得、寂滅の「止観行（対境止観）」は、『起信論』の本覚（法界一相の体）を根本に据えて十八界（根塵識）に解脱を見る（浄法界、仏界）のであるから、成仏思想（仏即覚義、仏界）にまで歩を進めたといえる。思想として解脱を断言していることが画期を為すのである。

若干付言して、神会の無念について、論点だけを指摘しておくなら、神会『壇語』にいう、

真如は無念之体、以是義故、立無念為宗。若見無念者、雖具見聞覚知、而常空寂、即戒定慧一時齊等。（『神会語録』楊本 p10）

という神会の鍵語「無念」は、「雖具見聞覚知」という限り実は無念ではない。

それは『無生方便門』の基本論理である「眼見意知離念、即無隔障。是浄法界、是仏界という「眼見意知離念」に他ならない。上来『起信論』を通して考えた心、意、意識の関係では、見聞覚知は意に於いて作用する必然性がある。(染法界)、しかし離念、念不起、意識の不分別こそ十八界が尚も浄法界であることを根拠づけるのであり、先の神会『壇語』「雖具見聞覚知」を無念と呼ぶことと論理的な差異はない。(ちなみに、この一段の直語に続く「若眼見色…法塵三昧足」は五処解脱に他ならない)

しかも『無生方便門』の古層は冒頭に菩薩戒授戒儀を掲げて仏性戒の戒体(戒性)獲得を明言するのであり、戒定慧一体(一時斉等)を『無生方便門』の古層に看取することは可能である。神会の無念は離念に他ならないのであり、『無生方便門』に新古の変遷が存在するとすれば、むしろ神会の立場は古層に属し、『五方便』系は普寂(651-739)の立場(変容した新相)という配置も可能であろう。変節したのが普寂に代表される北宗であり、神会の北宗批判は多く『無生方便門』の古層(二乗批判)を根拠にするのである。

## 5 『無生方便門』の名称

『無生方便門』第一総彰仏体は『起信論』を明言しないが、『起信論』に多くを負っていることは明白である。些か主題を逸れるが、『大乘無生方便門』という名称もやはり『起信論』の語彙に準じて理解できる。

「方便」の語は道信「大乘安心要方便法門」に始まって、東山法門以来種々の資料に散見され、修道観の特徴を表すが、その意味は明確ではない。<sup>(16)</sup>

『無生方便門』授菩薩戒儀の冒頭部に「如来有入道大方便、一念浄心頓超仏地」とは見えるが、これは如来の優れた教化能力のことであるから、北宗の特徴を意味しない。そもそも『無生方便門』のような古層では「五方便」の五門体系自身が成立していかどうかという疑義も呈される<sup>(17)</sup>が、しかし、すでに普寂の周辺では「五方便」の語が特徴的であることも指摘されており、方便は五方便の意で定着して宗密にまで至ると理解できる。

『無生方便門』にあつては、第二開智慧門に

此不動是從定發慧方便、是開慧門、聞是慧、此方便非但能發慧、亦能正定  
開智門 (韓 [2018] p120)

というように「方便」は定慧と関連づけて理解されており、同じく第二では『維摩經』の縛解をめぐる一段を引いて智慧と方便を『維摩經』の所説を踏まえて論理的に検討している。

今、第一総彰仏体に戻つて、『起信論』に方便を考える手掛かりを求めるなら解釈品に三發心を説く第一信成就發心にいう、

問曰、上説法界一相、仏体無二。何故不唯念真如、復仮求学諸善之行。答曰、譬如大摩尼宝体性明淨、而有鈇穢之垢、若人雖念宝性、不以方便種種磨治、終無得淨。如是衆生真如之法、体性空淨、而有無量煩惱染垢、若人雖念真如、不以方便種種薰修、亦無得淨。 (T32,580c、大竹 [2018] pp247-9)

先に法界一相、仏体無二と説くのに、なぜ真如を念ずるだけでなく、諸善行を学ぶのかという問いに、たとえば大摩尼宝は体性は明淨といつても、鈇穢の垢があるように、人が宝性を念じて、方便を以て種々の鍊磨を用いなければついに清淨は得られない。人が真如を念ずるも同様で、方便で種々薰修しなければ淨を得られない。『起信論』は続けて、

以垢無量遍一切法、故修一切善行、以為対治。若人修行一切善法、自然帰順真如法故。(T32,580c、大竹 [2018] p248)

前段の方便種種磨治も、方便種種薰修も垢無量無辺に対して一切善行を対治の「方便(訳、加行・取り組み)」とするという意味である。それが法界一相、仏体無二を承けての答えであることは、『無生方便門』第一総彰仏体が『起信論』の当所を根拠に立論していることを考えれば、一切善行、一切善法が修行の方法となるのは理の当然であろう。

所言覚義者、謂心体離念。離念相者、等虚空界、無所不遍。法界一相、即是如来平等法身。(韓 [2018] p116、大竹 [2018] p111 参照)

このように方便は修行、方法、手立てなのであり、第二開智慧門にいう「従定発慧」もまた『無生方便』の基本姿勢である。『無生方便門』の方便はこの定慧の意味である。

しかし「従定発慧」とはいえ、その定慧の關係は体用關係同様の相即一体であることは先に見た。

北宗普寂の周辺で「五方便」という成語は成立したと見られるが、『無生方便門』の古層は普寂以前だとすると、その意味は現存する五方便系諸本を前提にはできない。そこで前節で考えた智顛の止観法門『小止観』には方便は「定慧方便」の意で使用されている<sup>(18)</sup>。

方便は『起信論』や『小止観』にあっては一切善法であり、あるいは定慧がそもそも方便（方法）なのである。

『起信論』「覚心初起」の直前で「満足方便一念相應」という方便は修行を完成してというほどの意味であり、『無生方便』の「方便」を理解する示唆を与える（後述）

では無生とはいかなる意味か、それは方便の対象であるが、『起信論』の続き、四種方便の一段に手掛かりを求めると、

略説方便有四種。云何為四。一者行根本方便。謂觀一切法自性無生、離於妄見不住生死。觀一切法因縁和合業果不失。起於大悲修諸福德。攝化衆生不住涅槃。以隨順法性無住故。  
(T32,580c、大竹 [2018] p248)

方便には四種ある。四とは一に行根本方便。一切法自性無生を觀じ、妄見を離れ生死に住せず。一切法因縁和合して業果不失を觀じ、大悲を起こして諸福德を修す。衆生を攝化して、涅槃に住せず。法性の無住に隨順するからである<sup>(19)</sup>。

『起信論』は先に法界一相、仏体無二と云ったが、ただ真如を念ずるばかりではなく、諸善行の方便が提起されたが、それを四種方便に分かつ。第一が行根本方便で、「觀一切法自性無生。離於妄見不住生死」の一段である（後述）。

この一切法自性無生の「無生」こそ謂わば離言真如、離念之体の属性といえる。そして自性無生の体とその「一切法自性無生」を觀ずる根本方便は、「法

界一相、仏体無二」に対する諸善行方便の関係である。

『大乘無生方便門』は、「大乘の無生と方便の法門」の意であり、つまり大乘の「自性無生（離言真如・離念之体・法界一相）」と「定慧方便」種種磨治の方法（一切善行、一切善法）を提示する法門の意と理解してよいであろう。この大乘の無生と方便の法門は、『起信論』の根本主題であり、『無生方便門』の基本構図（離念之体と十八界一切処解脱の展摂関係）を端的に表明することにもなるのである。

これは『五方便』として諸経を所依として方便門を展開したという理解（宗密に代表される）を再考させる、つまり『起信論』は諸経論の陣頭を飾る方便門ではなく、決定的に重要な基本原理を提起する所依経論であるが、印順も第一総彰仏体（起信論）で『無生方便門』は完結しているといった認識を示していた。

第二門以降の経論は『起信論』と同等同様の性格ではないことを推測させる。つまり宗密の理解のように「経論に依る」のではなく、諸経を会通する基本原理の定礎が第一総彰仏体なのである。

『起信論』の影響はかくも決定的だが、しかし『無生方便』は依然、独自性を見せている。

## 6 結論

『無生方便門』の禪定思想について第一総彰仏体を中心に考えた。

もとより『無生方便門』を始めとする、五方便系諸本は複雑な成立過程が存在し、最古形と目される『無生方便門』すらさらに遡る原本が想定されている<sup>(20)</sup>。確かに内容的にもいくつもの主題の集成という印象は強い。

翻って宗密(780-841)『大疏鈔』の登場ですら、普寂(651-739)の没後100年、すでに禅宗はいわゆる南宗の隆盛期であり、『無生方便門』の原初形を尋ねることは既に不可能に近かったであろう<sup>(21)</sup>。

宗密『大疏鈔』の解釈では、「疏方便通経者、方便謂五方便也」を承けて、

第一総彰仏体、依起信論」と、第一が『起信論』によると明言するが、そもそも「方便通経者、方便謂五方便也」として五経を所依經典として挙げるのは妥当なのか。

宗密の語は、五経（及び諸経）を「方便によりて経を通ず、又は、方便もて経を通ず」と解すほかないが、そもそも宗密独自の理解が浸透して広く定着してしまっているが、内容的には五経は所依經典とはなっていない<sup>(22)</sup>。『無生方便門』の体系は第一総彰仏体で定式化された定慧の基本原理の構図（定慧という「方法（定慧方便）」を通して十八界の当所に解脱を了悟する）が余の四門、あるいは諸経にも語彙を変えつつ貫徹される、

『無生方便門』の体系は『起信論』に依るといえるが、ただ第一総彰仏体は『起信論』に依るとは明言しない。これは偶然ではない。第一総彰仏体はあくまで『無生方便門』独自の論理だという前提で、第二以下の諸方便も宗密の理解のように「五経論に依る」のではなく、第一の『起信論』に依る独自の論理を逆に諸経の解釈にまで貫徹させる、という意味で諸経の「会通（通経）」が全体の構想であろうと理解できる（もちろんこれは諸門諸経の解釈を検証せねばならないのだが）。

印順も第一総彰仏体（離念門）で既に『無生方便門』は完結してしまっているという理解も第一の基本原理を諸経に貫徹させるという意味では妥当である<sup>(23)</sup>。

近代の研究も宗密の示した基本構図を踏襲してきたといえるが、それでも宗密の理解や神会の本宗批判の妥当性にはしばしば疑義が呈されてきた。

近年、韓伝強は五門の間には次第関係がある（韓 [2013] p355）といい、『大乘五方便北宗』等の禪法体系を「定慧双彰」の実践と理解して、そこに天台智顛と天台宗の修行実践の影響を見ているが（韓 [2013] p341）、天台止観の影響でいえば、拙稿では更に踏み込んで、『小止観』に代表される対境止観という六根の止観行に『無生方便門』への影響関係を見出した。

『無生方便門』は「従定発慧」といい、一見、語としては教学の基本に沿っ

ているが、実際は「従定発慧」は「発慧能正定」との相即関係、定慧の一如、一多の相即関係に翻案されている。それは「従定発慧（発慧能正定）」の相即関係であるが、体用関係の意味を含む。

天台『小止観』対境止観の論理、六根六境の十二事（約此十二事修止観、故名爲歷縁対境修止観也）を「覚性は浄心体」と十八界（法界）いう体用、一多、展摂の関係に発展させて解釈したのであり、定慧関係もまた、体用、展摂、寂照等と同様の定慧一等、一如不二の二項論理に帰着している。それは心、色、心色俱の関係が覚自觉他、覚満の覚三義に重なって帰一する構図にも通ずる。

『起信論』の「法界一相」「離念之体」といった本覚や覚性に依る成仏論（仏即覚義）を原理として、智顛『小止観』対境止観の実践を繋いで天台の止観行がそのまま成仏解脱のための修道論に発展しているといえよう。

『起信論』本覚（無生）と定慧修道（方便）を、『小止観』対境止観を依用して展開し、その統合として根塵識、陰入界十八界の当所に解脱を見る一切処一切行（「対境止観」）即解脱（「本覚」）という禅定の到達点が提示されたのである。<sup>(24)</sup>ではなぜ「対境止観（歴縁対境止観）」なのか。『無生方便門』の特徴的な論理の源流は再言すれば、慧思や智顛の止観法門にある。そしてそれを継承した道信東山法門の禅定が想定されねばならない。

道信の段階で「随意意三昧」「歴縁対境止観」が定慧方便として摂取されていた可能性は『楞伽資師紀』道信章からも看取できるのであり、随処に痕跡を見ることは可能である。<sup>(25)</sup>

『無生方便門』の原初形は道信以来の「対境止観（歴縁対境止観）」を発展させた解脱思想を留め、むしろ五処解脱、一切処解脱等は、後の南宗禅の主題を先取しているといえる。

その淵源は慧思『随意意三昧』、智顛「対境止観」であり、翻って後世の禅宗にいう、いわゆる「動中工夫」は、『無生方便門』が「五処解脱」「一切処解脱」と説いた解脱に、期せずして到達（帰一）しているのである。そこには後の「南宗」の源流として継承される道信以来の連続面が伏在しているのである。

## 注

- (1) 韓 [2018] pp112-138
- (2) 宇井 [1935] 鈴木大拙『禪思想史研究 第三』(岩波書店 1968、pp167-172)  
河合 [1990]、田中良昭・程正『敦煌禪宗文献』大東出版社 2006pp94-101、  
伊吹 [2012]『大乘無生方便門』は、神秀と普寂系でまとめられたとされ、変遷を図示している (p54)。同氏には特に普寂 (651-739) 晩年の説法と見られるという指摘がある (伊吹「戒律と禪宗」p104)、韓 [2018] の五方便系統図参照
- (3) 韓 [2013] も体用関係を軸に二項図式で理解しているが、  
韓 [2013] p336表 47 参照。そこでは体用及其関係①離念是体、見聞覚知是用。寂是体、照是用。②寂而常用、用而常寂。寂而常用、則事則理。寂而常用、則空則色。用而常寂、則色則空。と整理している。
- (4) 二自在門 その他の対応箇所  
『大乘無生方便門』第二 耳聞声心不起是根本智、不染六塵、处处解脱。(韓 [2018] p125)  
『大乘五方便北宗』第一 離念是体、見聞覚知是用。寂是体、照是用。(同書 p166)  
『大乘五方便北宗』第二 心不動是智是定、五根不動是慧、是用、是名開智慧門。(同上 p167)  
『同書』第二 眼見色心不起、是根本智。見自在是後得智 (同上 p173)  
『同書』第四 心識俱不起、是諸法正。心不起是定、識不起是慧、離自性是定  
『大乘五方便北宗之二』第一 心不起、是真空。見聞覚知是妙有。(同上 p207)  
『同書』第二 体用分明 神解自在 心不起是体 見聞覚知是用。用而常寂、寂而常用、寂照照寂。寂是定、照是慧、用而常寂是定、寂而常用是慧。(同上 p210)
- (5) 心色俱離のみならず、最後に心色を統合する構図は『起信論』にはない。覚の三義は、「心体離念 (覚義)、法界一相 (覚他)、如来平等法身 (覚満)」、「離心 (自覚) 離色 (覚他) 心色俱離 (覚性円満)」(韓 [2018] p116、p143)、「離心 (心如)、離色 (色如)、心色俱如 (覚満・如来)」(同書 p118) 等、随処に

見出され、心色を統合する論理だが、心色関係も覚の三義が結局、覚に帰一する論理に重なる。その覚は「仏即覚義」が思想的起点となっている(同書 p116 参照)。宗密『大疏鈔』の解釈は整然として明晰だが、離色(覚他)に相当する一切処解脱(五処解脱)を論理体系から完全に捨省しており、宗密を承けた宇井の誤解も生むことになる(宇井 [1935] p357)

- (6) 『起信論』原文は、如菩薩地盡。満足方便一念相應。覺心初起、心無初相。以遠離微細念故、得見心性。心即常住、名究竟覺。是故修多羅說。「若有衆生能觀無念者、則為向仏智」故。(T32,576b、大竹 [2018] p34/p115)  
阿梨耶識の二義が、能攝一切法、生一切法、という能摂能生の義で、それは直ちに覚、不覚に対応する。(32,0576b、大竹 [2018] p111)、伊吹 [2016] p91 注(25) 参照。

- (7) 『大乘起信論』解釈分に覚性について、無明相不離覺性(T32,576c)、若離覺性則無不覺(32,577a)といい、「心性」も所謂心性不生不滅(同 576a)、所謂心性常無念(同 577c)、心性不起即是大智慧光明義故(同 579a)、心性離見即是遍照法界義故(同 579b)、心性無動則有過恒沙等諸淨功德相義示現(同 579b)など『無生方便』の根本原理に通じる性格である。

- (8) 宇井 [1925] p359-60 十八界根塵識常空寂に言及して、「心を警起すれば即ち十八界」なのではなく、十八界に染淨がある。心不起は「不分別」で淨法界といい、見聞覺知の作用を仏事と呼ぶのは「根に於いて如来名を立て、此如来が仏事を為す所が、即ち六識の作用」であるのが淨法界の光景である。

- (9) 体用に代表される二項関係の多様な表現は諸本に見られる基本的な特徴といえる。

『大乘無生方便門』第一 離念名体、見聞覺知是用。寂而常用、用而常寂、即用即寂。(韓 [2018] p118)

『大乘五方便北宗之一』第一 離念是体、見聞覺知是用。寂是体、照是用、寂而常用、用而常寂(同上 p166)

『同上』第五 問、是沒是淨心体。答、覺性是淨心体。(同上 p201)

『大乘五方便北宗之二』第二 体用分明、神解自在。心不起是体、見聞覺知是用(同書 p210)

根本原理である覺性是淨心体が定礎されると、一方で用に展開されるのは心

色関係と同様であり、法界十八界に展開するのも同様の論理構造といえる。それは離念之体・見聞覚知是用のみならず不動・動、根本智・後得智、定慧、寂照等々の語彙で随所に展開される、つまりは体用一体の論理である。

(10) 注(3) 韓 [2013] p118 二項図式参照

宇井 [1935] p359 では、『無生方便門』「心警起即違仏性、護持心不起即順仏性」を宗密『大疏鈔』が「警起心即有心色」というに従って、眼見色は「色心対立」即ち妄念と理解する。従って意は、眼と同じく、染法界を知り、浄法界を知ることはない。之を、心を警起すれば即ち十八界、無心は即ち一相」というのは『無生方便』の所説としては正しくない。『無生方便門』第二開智慧門に「問、是沒是 邪定正定？二乘人、滅六識、證空寂涅槃、是邪定」というように、宗密の「(意) 不同知浄法界」ではむしろ滅六識に墮ちる。浄法界は、「於離念中、眼見色、不分別、即於眼處得解脫」である。心警起、心不起は、心というより意と意識の起、不起の問題であることが、『無生方便』の意図であることが分かる。

意は五根と共に作用(宗密「意同知染法界、意不同知浄法界」)するが、厳密には「意識」の分別と不分別が染浄を分かつのである。「眼見色が「色心対立」即ち妄念」なのではなく、眼見色は色の十八界であり、その十八界に染浄二界が分かれるのである。

(11) 『起信論』にいう、

若修止者。住於靜處、端坐正意。不依氣息、不依形色。不依於空、不依地水火風。乃至不依見聞覺知。一切諸想、隨念皆除。亦遣除想。以一切法、本來無相。念念不生、念念不滅。即當攝來住於正念。是正念者。當知唯心、無外境界。(T32,0582a、大竹 [2018] p)

(12) 『天台小止観』正修行第六は坐中修と歴縁対境を止観の基本構図とする(T46-466c)。ただ「歴縁対境止観」は坐中正観から歴縁対境へ、段階を想定しているとされる(安藤「天台四種三昧」)(大野 [2004] p148、注(133) p197 参照)

(13) 止観双運は『起信論』止観二門共相助成も同様である、

若行若住若臥若起。皆應止観俱行。所謂雖念諸法自性不生、而復即念因縁和合、善惡之業、苦樂等報、不失不壞。雖念因縁、善惡業報、而亦即念性不可得。若修止者、対治凡夫、住著世間。能捨二乘怯弱之見。若修観者、対治二乘、

不起大悲、狹劣心過、遠離凡夫、不修善根。以此義故。是止觀二門。共相助成不相捨離。若止觀不具。則無能入菩提之道。(T32,583a、大竹 [2018] p332) 『起信論』の止觀は、復次若人唯修於止、則心沈沒、或起懈怠。(T32,582c、大竹 [2018] p324) が、『楞伽資師記』道信章4の止觀俱行を説く一段に引かれており、その影響を認めてよい(柳田聖山『禪の語録2楞伽資師記』p206参照)。また本段では、若修止者。住於靜處、端坐正意。(T32,582a) に対して四威儀止觀が説かれる。この『起信論』の四威儀止觀は『小止觀』の対境止觀とともに『無生方便門』の禪定觀、延いては初期禪宗の禪定觀の原型といえる。

- (14) 如是乃至、六根清淨、六根離障。一切無礙是即解脫。不見六根相、清淨無有相。常不間斷、即是仏。(韓 [2018] p115)
- (15) 冒頭 注(2)の一切無礙是即解脫と同義である。  
宗密の『疏鈔』二開智慧には、眼見色、不被色塵礙、眼菩提云々。耳鼻舌身意亦然。六根不礙諸塵相、即是圓滿大菩提。という表現が見いだせる。ここには語彙の相違はあっても、共通の論理が開けてくる。  
『大乘五方便北宗』之二 解脫是自在義、…不隨六塵境、即是自在(韓 [2018] p205)、六根不起、名為解脫。心不起是體、見聞覺知是用(韓 [2018] p210)
- (16) 河合 [1990] p114
- (17) 注(2) 伊吹 [2012] p54 等参照
- (18) そもそも『小止觀』には方便行第五があり、夫修止觀。須具方便法門。有其五法 第六正修行に二門を開く。その第二が歷緣對境止觀である。  
復次第二 明歷緣對境修止觀者。端身常坐、乃為入道之勝要、而有累之身、必涉事緣。…若於一切時中。  
常修定慧方便。當知是人必能通達一切佛法。(T46,466c)  
『小止觀』「若於一切時中、常修定慧方便」という方便は「巧みな手立て」(大野 p199) と理解されているが、『起信論』でも方便は心如本覺に対する始覺を導く修道という方法の意味である。
- (19) 『起信論』の四種方便とは、  
略説方便有四種。云何為四。一者行根本方便。謂觀一切法自性無生。離於妄見不住生死。觀一切法因緣和合業果不失。起於大悲修諸福德。攝化衆生不住

涅槃。以隨順法性無住故。二者能止方便。謂慚愧悔過。能止一切惡法不令增長。以隨順法性離諸過故。三者發起善根增長方便 謂勤供養禮拜三宝。讚歎隨喜勸請諸仏。以愛敬三寶厚心故。信得增長。乃能志求無上之道。又因弘法僧力所護故。能消業障善根不退。以隨順法性離痴障故。四者大願平等方便。所謂發願盡於未來。化度一切衆生使無有余。皆令究竟無余涅槃。以隨順法性無斷絕故。

先出(13)『起信論』止觀俱行の一段には「自性不生」という表現も見える。所謂雖念諸法、自性不生、而復即念因縁和合、善惡之業、苦樂等報、不失不壞。(T32-583a、大竹[2018] p332

- (20) 注(2)河合[1990]、伊吹[2012]論文、及び韓[2013] p94-6/102-9、韓[2018] p226で五方便諸本の系統が考察されている。
- (21) 『円覚経大疏釈義鈔』卷三之下(Z14-p277c)
- (22) (五方便の用例 河合[1990]) 宇井[1935] pp356-360は、宗密『大疏鈔』を解説したに過ぎないが、それゆえ誤解も生じた。
- (23) 印順[1971] 邦訳 p181
- (24) 『小止観』第六正修行の第二明歴縁対境止観にも、随縁対境止観の修習を勧め、若於一切時中、恒修定慧方便、当知是人必能通達、一切弘法(467c 大野[2004] p148)というのは、明快な定慧方便の定義といえる。大野[2004] p199注(143)参照
- (25) 拙稿「一切処解脱－『大乘無生方便門』と対境止観－」(禅文化研究所紀要 2012 予定)

また侯莫陳『頓悟真宗要決』師曰、行住坐臥語笑作生活時、施為挙動、一切時中常看不住、即得。(韓[2018] p270)、伝稠禪師撰『大乘心行論』凡為修道、行住坐臥飲食語黙、常自覺悟(韓[2018] p383)等は慧思『隨自意三昧』六威儀禪定の構成と共通である。

## 略記一覧

- 伊吹[2009] 伊吹敦 「戒律」から「清規」へ－北宗の禪律一致とその克服としての清規の誕生－(『日本仏教学会年報』74・2009pp49-90)

- 伊吹 [2012] 伊吹敦「『大乘五方便』の成立と展開」『東洋学論叢』37 東洋大学 2012
- 伊吹 [2016] 伊吹敦「初期禪宗と『大乘起信論』」『東アジア仏教学術論叢』巻4 東洋大学 2016.02
- 印順 [1971] 印順『中国禪宗史 - 從印度禪到中華禪』[正聞出版社、伊吹敦訳、山喜房仏書林 1997]
- 宇井 [1935] 宇井伯寿『禪宗史研究』岩波書店 1935
- 大竹 [2018] 大竹晋『大乘起信論の成立史』国書刊行会 2018
- 大野 [1994] 大野栄人『天台止観成立史の研究』法蔵館 1994.
- 大野 [2004] 大野栄人他『天台小止観の訳注研究』山喜房仏書林 2004
- 賈 [2013] 賈晋華『古典禪研究 中唐至五代禪宗發展新探 [修訂版]』(上海人民出版社 2013、邦訳、汲古書院 2017)
- 韓 [2013] 韓伝強『禪宗北宗研究』宗教文化出版社 2013
- 韓 [2018] 同『禪宗北宗敦煌文献録校与研究』江蘇人民出版社 2018
- 竹村 [2017] 竹村牧男『大乘起信論』を読む 春秋社 2017
- 塩入 [1988] 塩入法道 1988「慧思・智顛における随自意三昧について」(『印仏研究』36 (2) ,248.
- 河合 [1990] 河合泰弘「『北宗五方便』とその周辺」駒澤大学仏教学部論叢集 24,1990
- 河合 [1992] 「北宗禪と五方便」『宗学研究』34pp260-265 駒澤大学曹洞宗宗学研究 所 1992
- 河合 [1993] 「『北宗五方便』と神会」『宗学研究』35pp219-224 駒澤大学曹洞宗宗 学研究所 1993